

# ロシア学事始め

中村喜和

一橋大学名誉教授(昭 32 社、昭 34 修社)

## ロシア学事始め、その前史

私の受け継いだ一橋大学のロシア語学には前史があった。大崎平八郎（昭 17 学）さんが『如水会報』の 1994 年 5 月号に「茂木（ロシア語）講師の思い出」という興味津々の随筆を寄せている。大崎先輩はロシアやソビエトの政治・経済を専門とする世間周知の経済学者（1919～2005）。二ページに満たない短文の中で、大塚金之助教授の茂木さん宛ての書簡を発見したというエピソードを織り交ぜながら、茂木講師の温かい人柄を追想し、「ファシズムの嵐が吹き荒れ言論思想の弾圧が厳しかった戦前・戦中の時代にあって、ロシア語講義を存続させていた自由でアカデミックな学風が戦後の学制改革の際、社会学部を創設させたエネルギーともなった」と結んでいる。茂木威一先生はちょっと変わった経歴の持ち主だった。生まれは 1890 年、長野県の産である。大崎さんの文章によると、陸軍幼年学校、陸軍士官学校卒、その卒業の年に、ロシア語研究のために革命直前のモスクワへ留学を命ぜられる。かの地で学ぶこと 2 年（大正 4～5 年）。帰国後大正 8 年には退役。その後はロシア民族学研究に専念し、陸士や陸大の語学教官を務めながら、多数の論文を発表。東京商大には昭和 3 年から 18 年まで勤務。（ただし昭和 10 年から 18 年まで中断。）不思議なのは、陸軍当局が幼年学校と陸士の課程を終えたばかりの金の卵をモスクワへ送って留学までさせながら、何故かあつけなく退役を許してしまったこと。日清・日露の役は終結して久しく、第二次大戦がまだ勃発の兆しもない時期である。日露関係は未曾有の蜜月的良好な状態を謳歌していた。とはいえ、石光真清の悲壮な手記を読んだことのある者ならば、ロシア語に通じた若い将校のモスクワ行きとなると、イアン・フレミングの映画のなかの 007 ばりの血沸き肉躍るような活動を期待しても不思議はないであろう。それどころか、大崎さんの言葉を信じるならば、茂木退役陸軍大尉は戦争が敗戦と決まったその年のうちに「服部之総や三枝博音とともに鎌倉アカデミアの創立に参加し、慶応大学にも関係された」という。一個の生活者としてみれば、国家の安全にかかわるような仕事に身をささげるよりも、令名たかい鎌倉アカデミアの創立者として過ごされる方がはるかに安心安全だったことは言うまでもない。これこそ慶賀に値するような身の処し方だったに違いない。茂木さんが晩年に国立市をついの棲み家とされ、独り娘の葉子さんが父親の教え子の一人佐治正三さん（昭 16 学）に嫁がれたことも大崎さんが言及されている。そのお住まいは国立市の中 2、高級スーパー紀伊国屋の裏手、早く言えば一橋大学と同じ町内にあった。私が現役の一橋大学の教員だったある日、その佐治さんが私の研究室に見えられて、私のロシア語初級の授業に出席された



いというお話があったとき、私はびっくりするほかなかった。佐治さんはある大銀行を定年でお引けになり、時どき趣味の山歩きをされて日々を過ごしておられるのだった。むろん私にお断りする理由はない。多少メタボになりかけた体型を自嘲され、「これは過労による労災そのものです」などと冗談を飛ばされた。銀行員時代、ニューヨーク支店長のポストにあったころ、連日顧客の接待でフル・コースの夕食を付き合わざるを得なかった、というのである。幸運だったのは、佐治さんご夫妻のご好意で、主としてロシア語からなる茂木威一先生の蔵書を大学の図書館にご寄贈いただいたこと、当時の私は幼年学校・陸士卒という目もくらむような先生のご経歴について無知だったせいで、茂木先生のモスクワ留学の詳細をご遺族から何一つうかがえなかったことである。かなり古びた旧蔵書の中にむやみに鉄道の時刻表が多かったことが印象に残っているだけである。輸送能力は兵用地誌の根幹だから、これはかなり怪しい。茂木先生だって時には 007 のような冒険的修羅場をくぐられたかもしれないのである。その後、ある友人の調べで、茂木先生の講義の聴講生たちがロシア語と日本語の手ごろな辞書をつくるためにドイツで出た「ランゲンシャイツの露独辞典」を翻訳されたことが某新聞に取り上げられたことを知った。

## 二人の先生、二つのゼミナール

私は2年生に進学したとき、プロゼミ（前期ゼミ）として金子先生のゼミナールを選択した。第二外国語としてえらんだロシア語がすっかり好きになっていたからである。金子ゼミのテキストは何であったか、いま覚えていない。金子先生は東京外語の学生時代ラグビー部に属しておられたとかで、頑丈な体格をしていて、寡黙な人柄だった。学生運動に熱中のあまり警察に勾留され一月ほど「臭い飯を食わされた」という噂があって、それが先生の魅力だとして私の他にもロシア語のゼミを選ぶ学生がいた。ただし下戸で、酒はまったくやられない。専門はロシアの思想史で、ロシア文学の中ではプーシキンがお好きで、彼の詩を集めて日本語に訳された『プーシキン詩集』が岩波文庫に入った。私は早速書店で一冊買い求め、授業の時に先生にサインしていただいた。いま書棚で探したが、大切にしていたそのサイン入りの『プーシキン詩集』が見当たらない。引っ越しを繰り返しているうちに失ったものらしい。3年生になって国立へ通うようになったとき、私は経済学部から社会学部に転部した。経済学は数字を相手の学問でむずかしそうなので身に就かないと考えたのだ。一橋では学部をあまり問題にしない。しかしゼミテンを採用するときには、それぞれの教師が自分の学部の学生を優先するから、私の興味がロシア語と決まったからには転部が自然と思ったのだ。3年生になると、さすがにロシア語のゼミを取る学生が少なくなり、ゼミの授業は週に一回井の頭公園の近くの先生の自宅で行われた。4年生も大学院生もみんなコミである。テキストは19世紀の思想家として名高いゲルツェンの盟友のニコライ・オガリョフの自伝的回想記だった。思想家の回想はそれ自体思想史の断片を読むような気がして、私は引き込まれるようにしてページを繰った。先生のゼミには大塚金之助教授のゼミテンたちも何人か



いた。思想史を専門とすると、自分もその思想を実現したいという気が起こるらしく、授業にあまり顔を見せない人もいた。稀に出席しても、スウッと姿を消してしまうことが多かった。あとで聞くと、その人は奥多摩の山中の村に住んでいて、いわゆる山村工作隊の隊員であるとわかった。奥多摩湖の岸べで武闘の稽古をしていたらしい。そういう時代があったのだ。

学部を卒業するときには卒論を書くのだが、私は中世ロシアの叙事詩の『イーゴリ軍紀』をテーマに選んだ。大学院に進むころになって、モスクワから送られてくる学術雑誌を読んで、中世ロシアの作品の一つ一つにモスクワとレニングラードの大学にそれぞれ専門家がいて、互いに議論を戦わせていることが分かってきた。

社会学部の大学院では各人が二つのゼミナールに属さなければならないというルールがあった。二番目のゼミとして私は躊躇なく亀井孝先生のゼミを選んだ。4年生のときに言語学の講義を聴講して亀井先生の博覧強記ぶりと一種特有な学者気質に心服していたのである。亀井先生は年配の点で金子先生と同生まれだったが、性格は正反対というくらい変わっていた。大学の入試では国語を担当され、世間の意表を突くような出題をすることで有名だった。先生の専門は日本語（国語と呼ぶことを禁じられた）と言語学だった。亀井ゼミの出席者は私のほかに一年遅れて入った田中克彦君だけだった。やはり一週間に一度東中野の駅に近い先生のお宅にうかがって、三人で言語学関係の著名な専門書を読んでそこに書かれていることを議論するのがだった。もちろん先生と生徒では学力が違い過ぎるので、先生のコメントを拝聴する形になるのがだった。私が先生のご指導を受けた数年間、ゼミテンの数は増えたことが無かった。一緒に読んだ本の中ではソシュールの『言語学講義』（バイイの編集になるもの）が印象に残っている。

亀井先生にも学問以外のことでずいぶんお世話になった。亀井先生のご尊父は亀井高孝さんで、こちらは著名な歴史家で、伊勢の漂流民大黒屋光太夫の研究者として世に知られていた。鎌倉の二階堂にお住まいだったが、ある夏のこと、北軽井沢の別荘で過ごされるためにご自宅の番人を求められた。私に白羽の矢が立ったのは、むろんご長男の孝先生の推薦によるものである。大変凝った設計の平屋の和風住宅で、留守番には朝と夕、隣家に住まわれるお嬢様手作りの食事が供されるという法外な条件付きだった。私は一冊の厚いロシア語の本をもって出かけ、ひと夏を勉強しながら快適に過ごした。

それから数年後、ソビエト科学アカデミー東洋学研究所から高孝先生に一通の招待状が届いた。大黒屋光太夫が帰国に際してペテルブルグに残していった数冊の和本が見つかった。そこには日本語で書かれた墨書の書入れがある。ついてはソビエトに來訪されその書入れを読み解いていただきたい、というのである。招待状の差出人は上記の研究所であるが、ソビエトで光太夫の研究に当たっているのはゴレグリヤードという若い研究者だった。何



故か私はゴレグリヤードと面識があった。亀井先生は招待を承諾され、私にとってはまたも先生の通訳兼付き人としてソビエトを訪問する機会が訪れた。渡航費と滞在費は先生が出してくださるのである。(ちなみに、高孝先生は吉川弘文館から出版されている高校生用の地図帳の著者として知られていた。) 私はその年に東大(駒場)のロシア語教員に採用されていた。この旅には言語学者の村山七郎博士も同行された。今から数えると54年前の1965年の夏のことだった。当時は東京とモスクワのあいだにフライトが無く、横浜から船でナホトカまで行き、あとはシベリア鉄道とハバロフスク→モスクワの国内線の飛行機を利用するしかないのだった。光太夫が手沢本に書き残したメモは次のようなものだった。「さてわサンペテルブルグえ参りそろ [この一語だけロシア語 priekhal] いまにて7月目になりそろ(以下省略)」。習い覚えたロシア語を使っているのもかえって哀れを催した。その文では庇護者のラクスマンと宮廷の仲介をしてくれた女帝エカテリーナ二世の側近のベスボロトコ伯爵に対してもあからさまな苦情が述べられているため、書物を献上する前に相手の名前を墨で消しているの、ますます読みにくい書入れになっていたのだった。

レニングラード滞在中に私がかねて文通によって知己となっていたロシア文学研究所(別名プーシキンスキー・ドーム)のベグノフ氏を訪ねた。この研究所はロシア文学に関するロシア第一の研究機関で、中世文学についても一つの部門を有していた。年一回の割で紀要も出版しているのである。その部門の長となっていたのはドミトリー・リハチョフ博士だった。ベグノフから私のことを耳にすると、博士はすぐに私を研究室に呼んで、次のような会話が合った。

「あなたはどんな作品を研究しているのですか」

『イーゴリ軍記』です。

「『イーゴリ軍記』の日本語訳はありますか」

「5種類あります。」

「では、日本におけるロシア中世文学の研究の現状をこの研究所で発表してください」

私はこういう事態を予想せず、むろん報告の準備をしていなかった。しかし博士の言葉は私の耳に命令のように響いた。

私はホテルに戻って仕事に取りかかり、一晩かけてロシア語作文を書き上げた。時は7月の半ば、ロシアの古都は白夜の最中だった。

私がかねて調べていた『イーゴリ軍記』の5種類の日本語訳を思い出しながらロシア語のレポートを書き上げると、ゴレグリヤードさんに校閲を依頼した。外国語の作文はよほど注意して書いてもミスが生じる。次の週にプーシキンスキー・ドームで読み上げた報告が、付け焼刃ながら私のロシア学事始めであった。

